

中山間地域における居住者間の景観認識の特性と相違に関する研究 — 山梨県早川町奈良田集落を対象として —

1G05J055-9 並木 義和
Yoshikazu NAMIKI

近年では、中山間地の空間が固有の景観を持つとして評価されるようになり、地域の魅力や価値を景観に見出すことが多くなったが、現状の環境に対しては、視覚像としてのみ捉えられており、地域の文化を捉えるに至っていない。そこで本研究では、属性の異なる地域居住者がどのように自身の景観を認識しているかを明らかにすることで、今後地域の魅力や価値を考える際に、景観という考え方を活用した一つの手法として提案することを目的とする。

Key Words : 景観認識、地域住民、中山間地域

1. 研究の背景と目的

1-1. 研究の背景

中山間地域における農山村文化には、地域に伝承されてきた風習や慣習、そして生業といった、生活に根ざしたものがあつた。このような地域における農山村文化とそのなかで育まれた景観は、地域住民にとって、生活していく上での必然的な結果として現れたものである。また近年では、中山間地域が地域固有の景観を持つ空間として評価されるようになり、地域らしい景観という観点からも、そうした景観の保全に関心が集まってきている。

一方で、都市農村交流や二地域居住などに表されるように、都市に生活する人々が農山村に興味を持ち、その地に根づく歴史的景観や豊富な自然環境に囲まれた暮らしなどに関しても魅力を感じ始めるなど、関心を持つ主体も多様化してきていると言える。

よつて、こうした農山村地域における魅力や価値を定義づけるには、今一度何を取り上げるべきかを丁寧に考える必要がある。その際、その魅力や価値を「景観」に求めることが多い。しかし、現状の環境における景観に対しては、目の前にそのものとして現れている風景、つまり視覚像としてのみ捉えられることが非常に多く、地域に根づいた文化を捉えるまでには至っていない。

1-2. 研究の目的

そこで、本研究では、属性の異なる地域居住者がどのように自身の景観を認識しているかを調査する。そして、それらがどのような条件によつて関係づけられるかを整理・考察することで、景観認識の新たな捉え方を提示するとともに、今後の中山間地域における新たな魅力や価値を見出す一つの手段として提案する。

つまり本研究は、①属性の異なる地域居住者の景観認識がどのように異なつてゐるかを明らかにする、②農山村地域の魅力や価値を考える際に、景観という考え方を活用した一つの手法として提示する、ことを目的とする。

2. 研究の概要

2-1. 既存研究

中山間地域をとりまく人々の景観認識に関する研究には、大別して①地域に現れる農村景観の実態・構造を解明しようとする方向からのアプローチ、②農村景観に対し、地域住民の意識・認識を明らかにしようとする方向からのアプローチ、の2つが挙げられる。

①に関しては、今里¹⁾の研究がある。この研究では農山村における空間分類の体系が持つ性質に関して、理論と実証の両面から対象を明らかにしようとしており、農山村地域を形づくる景観の構造と実態を明らかにするという目的のもと、地域住民の認識を扱う研究であると言える。また、農村景観の保全・維持を目的とした景観形成施策の観点から認識を把握するものに猪爪²⁾や、集落に現存する伝統的景観に対する意識の変遷を扱った岩松³⁾、あるいは景観認識に与える心理的規定要因の把握と構造化において認識の高さを判断している恵谷ら⁴⁾、集落における空間の改変がどのように住民の認識に影響を与えたのかについて土井ら⁵⁾など、農山村地域における地域住民の景観認識を様々な基準によつて把握するものが②である。

さらに、松島ら⁶⁾の研究では、各住民の属性によつてどのように認識が異なるのかを解明するという目的が掲げられており、本研究の目的に類似した研究であると言えるが、上記の既存研究すべてにおいて、景観の位置づけは視覚像として実際に目に見えるもの、そして外部の人間でも認識できうるものが対象とされており、農山村地域の魅力や価値を見出すために、各住民がその属性によつてどのような景観認識をしているのかを明らかにするという点で、本研究には意義があると思われる。

2-2. 研究の位置づけ

(1) 本研究の位置づけ

本研究では、研究対象に典型的な中山間地域である奈

奈良集落をとりあげ、地域に根づく農山村文化を構成する居住者の認識構造と特徴の把握を目指す。その際、景観を居住者が認識しうるものと位置づけ、居住者の属性の違いによる認識の相違と、集落における環境の変化との対応関係を見ることで、中山間地域における魅力や価値を景観の視点から再定義しようとするものである。

(2) 対象地の選定

対象地として、山梨県早川町奈良田集落をとりあげる。奈良田集落は、町内で最奥に位置しており、周囲を山々に囲まれた集落である。そのため、周囲に影響を受けることなく存続してきたと考えられ、特有の文化を有するとともに、居住者の認識も純粋に把握できると思われる。また、この集落は移転という空間の改変が起こっており、属性の異なる居住者の景観認識を把握するという本研究の目的に合致することからも、今回の研究対象地として、妥当であるとする。

2-3. 研究の方法

研究の流れを、図 2-1 に示す。居住者の景観認識について、対象地の概要と集落を形成している要素等を整理した上でヒアリングを行い、最終的に居住者の景観認識を属性の違いに着目して考察する。

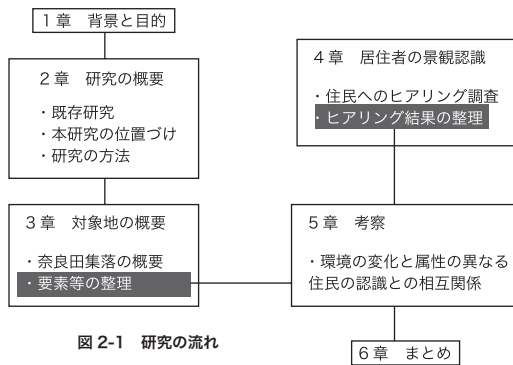


図 2-1 研究の流れ

3. 対象地の概要

3-1. 奈良田集落の概要

奈良田集落は山梨県早川町のなかでも最奥に位置し、上湯島・下湯島集落とともに西山地区に属する⁷⁾。奈良田集落の人口総数は60(男40、女20)、世帯数は40である⁸⁾。また、

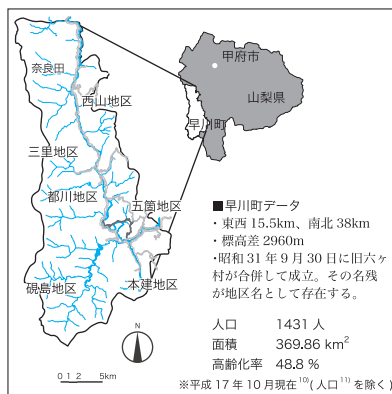


図 3-1 早川町の概要

奈良田集落は昭和31年に県営の西山発電のための西山ダム(奈良田湖とも言う)ができるまでは、早川の川岸

にできた塊村状の集落だったが、ダム工事開始とともに、大部分は河岸段丘やそれに続く斜面に移転して出来た集落である。そのため、現在ではほとんどが近代的な建築様式の家となり、以前の様子を見ることはできなくなった⁹⁾。早川町の概要と奈良田集落の位置は図 3-1 に示す。

3-2. 奈良田集落の現況

ここでは、奈良田集落の現況を、集落をとりまく要素等を含めながら、述べることにする。

(1) 集落立地の現況

3-1.でも述べたが、現存する奈良田集落は昭和30年代を境に、立地が河岸段丘の崖下から上へ大きく変わっている。また、それに伴う家々の建築様式の変化も見逃すことは出来ない。以下図 3-2、図 3-3 に、それぞれ移転前と移転後の集落の様子を示す。



図 3-2 奈良田集落の様子(移転前)：左
図 3-3 奈良田集落の様子(移転後)：右

(2) 集落を形成する生活空間

集落を形成してきた主な生活文化について概説し、集落内外の人々が認識しうる要素について整理する。

1) 焼畑農耕

奈良田の焼畑農業は、少なくとも数百年の間にわたって主業として続けられてきた。そして、前述の早川水系発電所の建設事業によって終わりを遂げた。

また、奈良田は溪谷に位置し、日照時間が短く、水温も低いことから、水田は存在しなかったようである。つまり、永い世代にわたって米を主食にすることができず、粟、稗、蕎麦などを主食とし、わずかな畑から大麦を得るようになり、雑穀に麦を混ぜ、戦時中主食の配給制度になってから、ようやく主食に米を混ぜるようになった。深沢¹²⁾は、これに関して、狭あいを補うための必要性として、広大な山林を畑に変化させる焼畑が発生発達したと指摘している。この焼畑は山林を伐採して焼き、その灰を肥料とするもので、その収穫量は低く、広大な面積を必要とするため、現金収入としての役割は無かった。

2) 年中行事

焼畑や曲物づくりという生業との関わりを中心に唱えごとの伴うものが数多く残されている。年中行事の全てが昭和35年頃までは旧暦で行われていたが、その頃から進学を中心に他出者が多くなり、その結果新暦に変わることになったようである。

焼畑のほとんど見られなくなった今でも、例えば「虚空蔵祭り」が行われているように、行事を知っている者の家庭での支配が及んでいる間は消滅しないだろうが、かつての生業を知らない世代になれば、必要の無くなった行事はやがて消滅する運命にある。

以上の生業に伴う共通の出来事である年中行事と、現存し可視的である場所について、集落を構成する要素として以下の表 3-1 にまとめる。

4. 地域居住者の景観認識

3. における現況整理を踏まえ、地域住民が抱く自身の景観認識を把握するべく、集落内に在住の住民を対象にヒアリング調査を行った。その結果を以下に述べる。

4-1. 住民へのヒアリング調査

(1) 調査方法

1) ヒアリングの概要

地域居住者の景観認識を探るために、ヒアリング調査を以下の要領で行った。その概要を表 4-1 に示す。

2) 回答者の属性

本研究では、ヒアリング調査の回答者を年代と居住歴

表 3-1 集落構成要素

項目	名称	内容	現存する	現存しない場所等の変化	備考
年中行事	初詣	1月1日	○		お餅米を持って拝礼のあと謡う
	七草粥	1月7日	△		現在でも行う家庭はある
	織入れ節句	1月11日		○	豊作祈願
	小正月	1月14日	-	○	
	月見			○	豊作祈願
	おぼこ人形		○	○	子どもに贈るものだが、現在は工芸品として現存
	鉄砲贈り		○	○	
	おかた打ち			○	出産祈願の祝行事
	奈良法王祭り	2月	○		奈良法王神社・天神祭りと呼び、農作物の被害を回避するために行う
	除けの送り節句	3月下旬	-	○	
	風送り			○	
	虫送り			○	
	鼠送り			○	
	虚空蔵祭り	8月13日	○		豊年への感謝祭
施餓鬼(お盆)	8月17日		○		
十日夜	10月10日	-	-	豊作に感謝する(未確認)	
霜月の祭り	11月17日		○	八幡神社の祭り	
山ノ神講	12月17日	○	○	山ノ神への感謝をする	
場所	奈良田トンネル				トンネル
	奈良田湖(西山ダム)				ダム
	塩見橋				橋梁
	社叢				指定文化財
	八幡神社			△	氏神様で、以前移転した可能性がある
	奈良法王神社				
	虚空蔵神社			○	現集落から川岸を挟んだ反対側から移転
	外良寺				
	水神様			○	前集落の下水道付近から移転
	白鳳観音				登山の安全祈願、集落移転後に新設
	道祖神			○	昭和8年に建てられたが、集落移転に伴い移動
	地神			○	
	天神様			○	旧分校付近から移動
	山ノ神				焼畑時代から存在
	板葺石置屋根根家			○	前集落から移転したもの
	山城屋			○	
	縄屋			○	富士吉田市から移築
	田中冬二詩碑				昭和37年に新設
	深沢定富家文書			-	未確認
	天狗森の祠			-	未確認
	炭焼き窯				
	白旗史郎記念館				写真館、集落移転後に新設
	歴史民俗資料館				資料館、集落移転後に新設
	奈良田の里				町営温泉施設、集落移転後に新設
	大家旅館				旅館、集落移転後に新設
	白根館				旅館、集落移転後に新設
	奈良屋				旅館、集落移転後に新設
	護符水				七不思議の名残
	塩の池			○	七不思議の名残、集落移転後に復元
	染物池			○	七不思議の名残、集落移転後に復元
奈良田公民館			○	旧西山小学校分校から増築、転換	
焼畑			○	集落移転に伴い、消滅	
かいと(畑)			○	前集落構で麦、黍、大豆、芋などを栽培	

による属性の違いを考慮したうえで選定した。年代については、集落の移転を経験した 50 代から 80 代を主に対象とした。また、居住歴については、もともと現地に定住しているか、もしくは一度外部に出てから帰郷して住んでいるか、あるいは結婚して来住したか、の三属性に分類して調査を行った。回答者の属性を表 4-2 に示す。

(2) ヒアリング調査の結果

ここでは、前掲した表 4-1 の質問内容をもとにヒアリングを行った結果のなかで、特徴がよくみられた内容について、説明していく。

1) ヒアリング結果

住民へのヒアリング調査を通して、集落に対して持っている印象を整理した結果、以下の 2 つに大別できる。

・[出来事]

住民が持つ認識において、具体的な場所や行動内容などが記憶に残っていたり、それらを実際に行う場合になるもの。つまり、事実関係についての内容である。

・[内面]

集落に対して、思うことや感じることなどの心の内面的な部分。つまり、気持ち的な内容である。

以上の 2 つに分類したうえで、年代による大分類ごとの指摘回数を整理した結果を表 4-3 に示す。表中の灰色になった部分は、分類ごとの一人当たり平均指摘回

表 4-1 ヒアリング概要

項目	詳細
日時	2008年10月～2009年1月
対象者	奈良田集落の居住者11名
所要時間	約1時間30分～2時間程度
内容	・回答者の基本情報 ・当時の奈良田集落に対する印象 ・現在の奈良田集落に対する印象 ・年中行事、産業等の事実関係について

表 4-2 回答者の属性

回答者No.	性別		年齢				居住歴			
	男	女	50-59	60-69	70-79	80～	定住	帰郷	結婚来住	不明
1	○		○				○			
2	○			○			○			
3		○			○		○			
4	○				○		○			
5		○		○					○	
6		○				○				
7	○			○						○
8		○		○			○			
9	○		○						○	
10	○				○				○	
11	○				○	○	○			
計	7	4	2	3	4	2	7	2	2	0

表 4-3 年代による大分類ごとの指摘割合

大分類	年代								総計
	50-59 (2)	60-69 (3)	70-79 (4)	80～ (2)	総数	平均	総数	平均	
出来事	11	5.5	11	3.7	34	8.5	19	9.5	75
内面	8	4.0	9	3.0	10	2.5	5	2.5	32
計	19	9.5	20	6.7	44	11.0	24	12.0	107

※平均とは、大分類の指摘回数を各年代の人数ごとに割った値、つまり一人当たりの平均指摘回数である。(各年代の後ろにあるカッコ内の数字は、その年代の人数)

数が、他の年代に比べ高いものに示したものだが、ここから読み取れることは、年齢が高い住民ほど、集落への認識が[出来事]によって構成されており、逆に、年齢の低い住民は、集落に対して何らかの気持ちを抱いているということである。また、今回のヒアリング調査によって得られた結果から、居住歴に特徴のみられる回答者の内容を表4-4に示す。

2) 出来事からみた景観認識

ここでは、調査結果から分類された[出来事]に関して述べていく。奈良田集落に対して持つ認識のなかで、出来事に関するものは、大抵が場所に関するものであるが、今回の調査でわかったこととして、現存するものに対しての印象・認識が、どの年代によっても少なかったということである。

まず、50代の回答者についていえば、子どもの頃の遊びについて述べたものが特に多かったが、その行動場所は、図4-1に示したような現在の集落図に留まることはほぼ無いと言える。60代の回答者に関しては、結婚来住した回答者が2名含まれているため、現存するものに対しての第一印象という意味合いで答えるものもあったが、来住した時期によっても結果は異なることがわかった。近年では子どもがほとんど残っていないため、子どもなじみの深い年中行事は途絶えているものがほとんどだが、集落移転時や直後といった時期に関しては、まだ子どもの数が多かったため、それらに関する遊びや行事についての認識も得ることができた。

3) 内面からみた景観認識

今回のヒアリング調査で[内面]に分類された内容について、概説する。年代によって認識にどのような共通点があるか着目すると、定住歴を持つ70代の住民は、ほぼすべての回答者が「今あるもの」を残したいと回答した。これは、特に現在消滅しつつある農山村文化についての意見である。また、80代の定住歴を持つ回答者については、戦時中から集落に暮らしていたため、近代化以前の生活の辛さも知ったうえで現在の集落を捉えていると考えられ、今だからこそできることをしたい、というような前向きな意見が

得られた。次に、居住歴に着目して、60代の結婚来住という履歴のある二人の回答者についてみると、余裕のなさが解消されて余裕を持ってみられるようになった、という回答や、来住だからこそみえてくる集落の現状に対する悲観的な気持ちを持っている、といった内容が得られた。最後に、一度外部に出てから帰郷した50代の回答者からは、一度外部に出たからこそ気づいた集落の魅力がある、との回答をした。

このように、年代や居住歴の違いによって、集落に対する内面的な認識が異なるということがわかった。

4-2. ヒアリング結果の整理

4-1.では、ヒアリングの結果について3つの視点から概要を把握したが、ここでは[出来事]について、より詳細な分類をしたうえで、年代によるものと居住歴によるものについて整理していく。



図4-1 奈良田集落図

表4-4 ヒアリング回答結果抜粋

No.	回答者	時期	大分類	回答内容
1	6	[移転前]	[出来事]	にんじん、大根の収穫などの手伝いはしていた。(カイト)
2	6	[移転前]	[出来事]	洗濯池で洗濯をよくした。(昭和7~8年くらい)
3	6	[移転前]	[出来事]	戦争に入ったことで、空襲警報を山の上の方でよく聞いた。
4	6	[移転前]	[出来事]	正月にはアズキ粥をよく食べた。ぬるれの木で串をつつて、団子をつつた。
5	6	[移転前]	[出来事]	正月には門松を切って玄関に立てた。
6	6	[移転前]	[出来事]	外良寺の裏にあるお墓には、よくお参りをしにいった。
7	6	[移転前]	[出来事]	奈良法王神社や虚空蔵神社、橋の向こう側の八幡神社にはよく通った。
8	6	[移転後]	[出来事]	食糧が無いとき、穀箱に焼畑で収穫した粟や稗などが蓄えてあり、周囲の家に配った。
9	6	[移転前]	[出来事]	交易のため、隣の増穂町まで天秤棒や下駄、セイロやハサなどの曲物を背負っていくのをよくみていた。
10	6	[現在]	[内面]	環境が違いすぎるので、昔の生活が良かったとは言わないが、よくここで生きてきたものだ、と思った。
11	7	[移転後]	[出来事]	富士市から移ってきたため、方言がまずわからなくて、慣れるまで3年かかった。
12	7	[移転後]	[内面]	山が高く、空が狭いと感じた。
13	7	[移転後]	[出来事]	外界を見るのが楽しくて、発電所職員になってからも、源流の調査と称してよく山に登っていた。
14	7	[移転後]	[出来事]	20代のときには既に猟を始めていて、小物(ウサギ、山鳥など)を中心に獲っていた。
15	7	[移転後]	[出来事]	丸山林道を通って、湯川(沢のこと)に沿って池の茶屋辺りまでは猟で歩いていた。
16	7	[現在]	[内面]	移住してきたものの、最近では若くても50歳代だし、特に人数が減ったと感じようになった。
17	7	[現在]	[内面]	お祭りはただお参りするだけで、子どもがいなくて神輿も担げないし、寂しい。
18	9	[移転前]	[出来事]	夏には、川遊びをよくしていて、ヤマメ、カジカをとっていた。
19	9	[移転前]	[出来事]	親の山仕事について、山に登りにいっただけでなく、基本的に山で遊ぶという経験を多くした。
20	9	[移転前]	[出来事]	木の実、山菜をとって食べた。
21	9	[移転前]	[出来事]	とにかく食糧が無かったので、梨、桃(食べられるというだけで、味はまずい)をとって食べた。
22	9	[移転前]	[出来事]	子どもクラブに入って、集落から対岸の今でいう公民館の前辺りでソフトボールをして遊んだ。
23	9	[移転前]	[出来事]	川が増水したとき、自作した鏡と鉾を使い、「ヨツデ」という仕掛けをして魚をとった。
24	9	[移転後]	[出来事]	集落移転時には、引っ越しのため荷物を出しているときに、遊びで天井裏を覗いたり普段見られない場所をみた。
25	9	[移転後]	[内面]	一旦集落外に出てみて、育った環境の方が良いと再認識した。(子どもが生まれたことでも)
26	9	[移転後]	[内面]	奈良田の文化に興味を持つようになった。
27	9	[移転後]	[内面]	白樺会に積極的に参加し、奈良田の文化を勉強するようになった。
28	9	[現在]	[内面]	奈良田集落は、単なるふるさとから、研究の対象になった。(印象の変化)

その際に、大分類の [出来事] をさらに小分類に整理すると、以下の4つに分類することができた。

・ [年中行事]

経験の有無は別として、住民が共通して認識している出来事の一つであり、大きく関係することである。

・ [生業]

実際の生活に即して生まれる出来事であり、これについても見過ごすことはできない。

・ [遊び]

集落移転前における、住民の子ども時代の記憶を探るときに必要な小分類である。

・ [風景]

他の項目に分類されないが、具体的な場所やものごとに対する記憶として認識されるものである。

以上の4分類に基づいて、結果を整理する。

(1) 年代による分類

住民の年代による出来事に対する指摘割合を、前述の4分類のもと整理した結果を表4-5に示す。表中に示した○と×は、現存するものしないものとして整理した。基本的に、ほとんどの項目が現存しないものとして整理されたが、70代に関しては概ねの分野で指摘割合が5%

表 4-5 年代による各出来事に対する指摘割合

年代	総指摘回数	出来事(指摘割合)							
		年中行事		生業		遊び		風景	
		○	×	○	×	○	×	○	×
50-59	11	0	0	1.3	5.3	0	5.3	1.3	1.3
60-69	11	0	1.3	2.7	1.3	0	6.7	1.3	1.3
70-79	34	8.0	5.3	2.7	16.0	0	12.0	0	1.3
80~	19	2.7	1.3	2.7	9.3	0	4.0	0	5.3

表 4-6 居住歴による各出来事に対する指摘割合

居住歴	総指摘回数	出来事(指摘割合)							
		年中行事		生業		遊び		風景	
		○	×	○	×	○	×	○	×
定住	47	8.0	5.3	2.7	20.0	0	19.0	1.3	6.7
帰郷	22	2.7	1.3	5.3	11.0	0	8.0	0	1.3
結婚来住	6	0	1.3	2.7	0	0	1.3	1.3	1.3
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※指摘割合は、出来事(大分類)の指摘回数を年代ごとの指摘回数の総和(75回)で割ったものに100をかけた値(%)である。

※指摘割合は、出来事(大分類)の指摘回数を年代ごとの指摘回数の総和(75回)で割ったものに100をかけた値(%)である。

を超えた。この年代は特に、集落の改変を中心としてすべての時代を経験しており、年中行事や生業の盛衰を目の当たりにしてきた年代だと言えよう。また、50代に関しては生業や遊びについての割合が高かったが、これについては、子ども時代が生活に即した手伝いや遊びを中心に行われていた、ということを示していると考えられる。

(2) 居住歴による分類

(1)と同様の考え方で、住民の居住歴による出来事に対する指摘割合を表4-6に示す。定住者の指摘割合としては、現在でも残っている年中行事についての話が伺えた。しかし、生業や遊びについては非常に多くの指摘が挙げたが、ほぼ70代以上という高年齢からして、現在ではその名残を留めているものはほとんど無いと言ってよいだろう。風景については、現存しない風景、つまり記憶のなかにある風景についての言及が多くみられたが、これは先ほど述べたように、高年齢の住民であるということから、集落空間の改変が起こってから時間が経っているからである、と予測することができると思われる。

以上、2つの視点で分類した結果、4-1.(2)で述べた内面的な認識だけではなく、出来事に関する景観認識においても、居住者の年代や居住歴によって、様々な相違がみられるということがわかつ

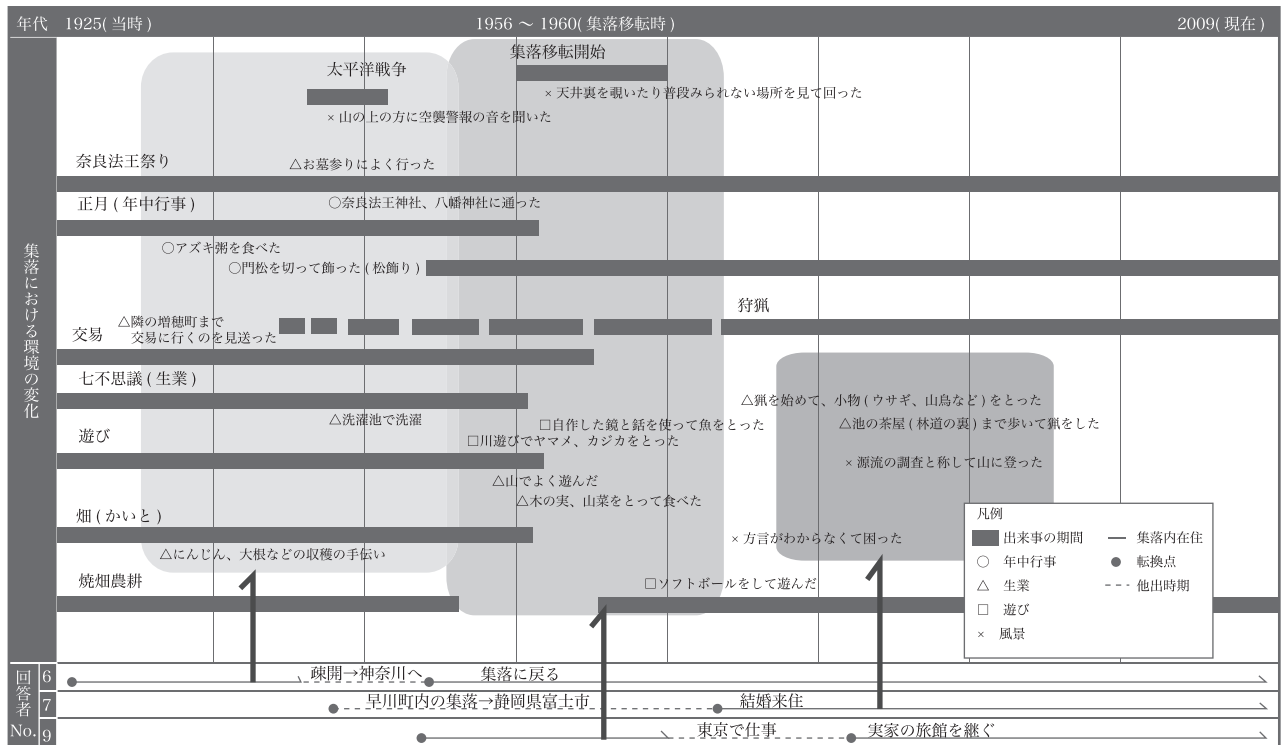


図 5-1 集落における環境の変化と居住者の認識

た。

次に、居住者の景観認識と集落空間における環境の変化がどのような関係にあるかを考察する。

5. 考察

3. 集落の成り立ちから 4. 居住者の景観認識までを調査してきた結果、みえてくることを考察する。

表 4-4 から、ヒアリングの回答結果抜粋についての内容を集落における環境の変化と併せて整理したものを図 5-1 に示す。今回取り上げた三人の回答者はそれぞれ、定住歴を持ち 80 代の回答者と、結婚来住歴を持つ 60 代の回答者と、一度外部に仕事へ出たけれどもその後帰郷して集落に在住の 50 代の回答者という、なるべく属性の異なる三者を選定した。70 代の回答者については、特に奈良田集落において最も共通点の多い属性のため、今回は対象とはしなかった。

図 5-1 について説明していくと、前述したように各住民の居住歴は大きく異なっているが、ヒアリングの結果を整理してみると、集落への印象・認識に、年代によるあるまじりかみられることがわかった。回答者 No.8 に関しては、特に集落移転前における、当時の記憶をもとに認識を話す場合が多かった。逆に、回答者 No.7 に関していえば、来住してきたときからの印象のみしか得られないことはもちろんだが、内面に関する認識よりも出来事に関する認識の方が多くことから、より深く集落に対して入っていくとする気持ちがみえてきた。

また、現存しない出来事についてがほとんどを占めたが、現在集落に住んでいる住民においては、特に当時の記憶を強く覚えていることや、あるいはその出来事について、後世に出来る限り残していこうとする意思が感じられた。

6. まとめ

(1) 研究の成果

今回のヒアリング調査により、以下のことが明らかになった。

まず、地域居住者の年代と居住歴によって、地域に対する認識がどちらの視点からみても明らかに異なるということである。これについては、今後より正確に調査を加えていくことで、その違いがどこから来ているのかを明らかにできると考える。

また、現存しないものや目に見えないものを景観と位置づけ、それらも地域住民の認識を構成している、ということが少なからずわかった。

(2) 今後の課題

今回対象とした奈良田集落は、現在常に人口が減少している地域であり、サンプル数の確保という点では、未だ確実性はとることができていないと考えられる。

ちなみに、本研究では地域住民へのヒアリング調査を詳細に精密に行うことによって、地域住民間における景観認識の相違をより深く見出せることに目的を置いていたが、調査結果の分類と、集落における環境の変化と地域住民の認識との相互関係を正確に把握したとは言い難い。

今後は、より正確な調査方法をとったうえで、景観認識の相違を明らかにしていく必要があると考える。

参考文献、補注

- 1) 今里悟之「農山漁村の〈空間分類〉- 景観の秩序を読む -」2006.2, 京都大学出版会
- 2) 猪爪範子「農村社会における地域景観認識の変遷に関する研究」都市計画論文集 NO.28, p.667-672, 1993, 日本都市計画学会
- 3) 岩松文代「山村地域における伝統的景観への住民意識-京都市久多地区を対象として-」森林研究 74 号, p.111-119, 2002
- 4) 恵谷浩子・村松真・麻生恵「農村地域における景観形成に関わる住民の認識と行動の構造化」ランドスケープ研究 vol.70, NO.5, p.575-578, 2007, 日本造園学会
- 5) 土井良浩・土肥真人「漁村のオープンスペースにおける空間改変と地区住民の認識に関する研究 - 島根県八束郡美保関漁港の後背集落を事例として -」都市計画論文集 NO.33, p.133-138, 1998, 日本都市計画学会
- 6) 松島洋介・奥敬一・深町加津江・堀内美緒・森本幸裕「琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移入住民の景観認識の比較」ランドスケープ研究 vol.71, NO.5, p.741-746, 2008, 日本造園学会
- 7) 西山村が早川町に合併される前、明治 22 年 7 月、湯島村、奈良田村が合併し西山村となった。
- 8) 早川町役場「住民基本台帳 (平成 17)」による。実際には、家のみ集落にあり他出している場合が多く、実数は少ない。
- 9) 早川町教育委員会「早川町誌」1980.1, 早川町誌編纂委員会
- 10) 総務省統計局「国勢調査 (平成 17)」
- 11) 山梨県早川町ホームページより引用。
- 12) 深沢正志「秘境・奈良田」1989.11, 星雲社